日本輸血・細胞治療学会 e-News

日本輸血・細胞治療学会 ニュースレター　第 25 号

2024 年 4 月発行

【本号の掲載記事】

1. 第 72 回日本輸血・細胞治療学会学術総会　総会長　挨拶
   「第 72 回日本輸血・細胞治療学会学術総会へようこそ」
   第 72 回日本輸血・細胞治療学会学術総会　総会長
   東京医科大学八王子医療センター　臨床検査医学科・輸血部
   田中　朝志
2. 第 72 回日本輸血・細胞治療学会学術総会　企画内容紹介
   第 72 回日本輸血・細胞治療学会学術総会　会長補佐
   東京医科大学八王子医療センター　中央検査部
   嘉成　孝志
3. 輸血療法における製剤・患者照合時の安全のための取り組み
   福岡大学病院　看護部
   辻　雄大
4. 血液センターよもやま話
   「北海道における血液センター広域事業運営体制」
   日本赤十字社　北海道ブロック血液センター
   阿部　康一
5. 編集後記
6. 一般社団法人日本輸血・細胞治療学会　広報委員会

第 72回日本輸血・細胞治療学会 学術総会へようこそ

第 72 回日本輸血・細胞治療学会学術総会　総会長
東京医科大学八王子医療センター　臨床検査医学科・輸血部
田中　朝志

第 72 回日本輸血・細胞治療学会学術総会を 2024 年 5 月 30 日（木）から 6 月 1 日（土）の 3 日間、京王プラザホテル新宿で開催いたします。開催まで約 1 ヶ月余りとなり準備は最終段階ですが、皆様に概要のご案内ができることを嬉しく思います。今回の企画は、石田明先生（埼玉医科大学国際医療センター）、牧野茂義先生（東京都赤十字血液センター）、嘉成孝志様（東京医科大学八王子医療センター）に中心的な役割をお願いし、さらに国際委員会、学術委員会、理事運営委員会や関東甲信越支部の評議員の先生方からも多大なるご支援をいただきました。ご指導を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

本学術総会はウイズコロナの時代に適合しつつ、参加される皆様が安全かつ快適に楽しめるように配慮致しました。ホテルが会場ですので空間的な制約はあるものの、皆様からご提案の企画をなるべく実現すべく前年同様の７会場としました。また、ポスターは広い企業展示会場の中に掲示し、余裕をもって見られるようにしてあります（WEB 上でデジタルポスターも閲覧可能）。昨年から再開された懇親会ももちろん開催します。今回は大きな丸いテーブルを囲んでの着席ビュッフェスタイルでご歓談いただく予定です。私の趣味で集めた全国の銘酒も用意しますので、ホテル特製のおいしい料理と共にお楽しみ下さい。素晴らしい景品（?）の当たるビンゴ大会も計画しています。

↑学術集会ポスター

今総会のテーマは「輸血・細胞治療のチーム医療推進～全ての患者に適切な輸血療法を～」としました。言うまでもなく輸血医療では古くからチーム医療が実践されてきており、その元祖ともいえる本学会がさらに高い目標に向けて推進することが革新的な輸血・細胞療法への糸口になると考えています。このテーマに沿って「コミュニケーションの改善からイノベーションへ」と題した、コミュニケーションの本質を掘り下げる企画を準備しました。本プログラムでは「輸血チーム医療に関する指針」の作成に携わった牧野先生のほか、医療コミュニケーションに造詣の深い４人の先生にご登壇いただきます。早稲田大学の村瀬俊朗先生には「心理的安全性」がいかに価値創造に重要か、筑波大学の中島俊先生には新たな医療コミュニケーションスタイルの解説をお

↑東京医科大学病院　空撮風景

願いしました。NPO 法人 COML の山口育子先生には患者目線でのコミュニケーションギャップとその解決への提案を、日立製作所の宇賀神敦先生には AI ホスピタルでの研究を通じた患者と医療者や職員間でのコミュニケーション改善によるイノベーションの可能性についてご提示いただきます。いずれも私たちの日頃の悩みを改善する道しるべになると考えています。

次は特別講演の概要です。理化学研究所の高橋恒一先生には人型ロボット「まほろ」と人工知能を組み合わせた再生医療の未来像についてのご提示をお願いしました。新たな科学研究のパラダイムの萌芽がみられると思います。東京大学医科学研究所の山﨑聡先生にはサイトカインを含まない化学的組成の明らかな培地によるヒト造血幹細胞の増幅技術についてご講演いただきます。ヒト造血幹細胞や白血病幹前駆細胞研究の新たなプラットフォーム提供が期待される研究です。次期 ISBT 会長である Pierre Tiberghien 先生には欧州での Hemovigilance と Patient Blood Management への取り組みについて、米国での有力な輸血安全管理者である Nabiha Huq Saifee 先生には医療安全を高めるための多職種連携における Transfusion Safety Officer の役割についてお話いただきます。さらに武蔵野美術大学の更科功先生による「ジュラシック・パークの夢」と題した講演もあります。彼は私の高校の同級生で『化石の分子生物学－生命進化の謎を解く（第 29 回講談社科学出版賞受賞）』、『宇宙からいかにヒトは生まれたか』などの著書があり、生命の進化に関する新たな知見を分かりやすく解説いただけると思います。

シンポジウム、パネルディスカッションは最新の輸血・細胞療法や各職種でのトピックスを中心に興味深い企画が揃っています。I&A 30 年の歩みと今後の展望、大量出血症例での新規血液製剤の可能性、適正輸血を推進するための tips、検査技師リフレッシャーコース、アフェレーシスナースのインシデント事例共有、細胞治療や CAR-T の新展開などがあり、演者の先生の了解が得られたものについては後日の WEB 視聴も可能です。また、台湾輸血学会と韓国輸血学会の代表者をお招きして「Hemovigilance in Asia」のセッションを設けました。日本代表として加藤栄史先生にご発表いただき、今後のアジアでの交流拡大に繋げたいと考えています。

以上のように会員の皆様の知的好奇心を刺激するようなプログラムが目白押しですので、ぜひ多くの方に現地に足を運んでいただきたいと存じます。交通至便の新宿の地で熱い議論と交流ができることを心よりお待ちしております。

↑京王プラザホテル（会場）からの遠景

第 72回日本輸血・細胞治療学会学術総会　企画内容紹介

第 72 回日本輸血・細胞治療学会学術総会　会長補佐
東京医科大学八王子医療センター　中央検査部
嘉成　孝志

2024 年 5 月 30 日～ 6 月 1 日で第 72 回日本輸血・細胞治療学会学術総会が東京　京王プラザホテル新宿で開催されます。今回の総会のうち臨床検査技師関連企画として 5 つの企画が予定されております。簡単ではありますが、内容をご紹介させていただきます。

①　シンポジウム「若手の登竜門（全国大学病院輸血技師研究会合同企画）」

以前より若手技師による認定取得や今後の目標・展望を発表いただく企画として開催しておりましたが、本年は全国大学病院輸血技師研究会との合同企画とさせていただき、若手技師と指導する立場の方にも講演いただきます。若手技師には経験や展望を、指導者には院内での教育・指導方法を中心に講演いただきます。双方の立場からの発言により、組織活性化を図るポイント・手法が見出される企画となることを期待しております。

②　シンポジウム「輸血検査症例検討会」

昨年の千葉幕張総会でも好評であった企画です。本年は「自己抗体保有症例」、「産科的危機的出血」、「ABO 血液型検査の予期せぬ反応」の 3 つの症例を講演いただきます。いずれも医療機関において遭遇する症例ですが、施設ごとに対応方法が異なる面もあり、対応に悩まされる機会も多いのではないでしょうか。皆様の施設での対応方法の整理や運用改善のきっかけとなる内容です。

③　共催シンポジウム
「輸血細胞治療領域における臨床検査技師のタスクシフト・シェアについて」

タスクシフト･シェアに関連した内容を 3 名の演者に講演いただきます。「病棟業務支援」､「細胞採取支援」、「医師業務支援」の実運用紹介を中心に、新規業務を展開するさいの経緯や業務効率化、教育方法に関して講演いただきます。既に導入を開始されている施設、また今後導入を検討している施設にとっても大変に参考となる企画です。

④　パネルディスカッション「輸血検査技師としての輸血管理の役割」

医療機関での血液製剤の適正使用を如何に行うかをテーマに 3 名の演者に講演いただきます。「血液センターとの連携」、「臨床へのアプローチ方法」、「臨床からの問い合わせに対する輸血部門の取り組み」と、院内の適正使用を推進するうえで重要な要素を取り上げていただきます。適正使用を進めるうえで他部門との情報交換・共有は必要不可欠と考えられます。会場全体で活発な討議となることを期待してます。

⑤　パネルディスカッション「輸血検査室管理体制」

ISO15189、I&A それぞれ別の外部認証制度の視点から講演いただきます。ISO15189 は輸血

検査体制や力量評価など検査に特化した内容について講演を頂きます。I&A は血液製剤管理や輸血手順の整備など輸血管理に特化した内容について講演を頂きます。輸血の安全性向上の観点では同一の方向性を示しているとも考えられます。それぞれの外部認証制度の特性を講演いただき、認証取得・維持を如何に活用し輸血の安全性へと展開するかを共有する機会となればと考えております。

どちらの企画も参加される皆様にとって大変有益な情報となると考えております。皆様のご参加を心よりお待ち申しております。

輸血療法における製剤・患者照合時の安全のための取り組み

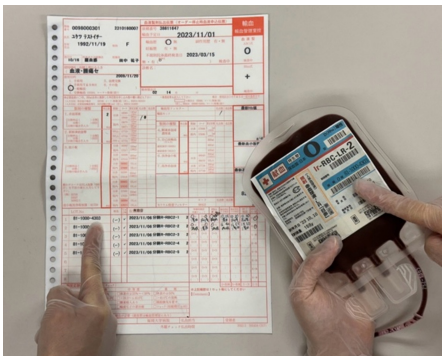
福岡大学病院　看護部
辻　雄大

安全な輸血療法ガイドにおいて、安全な輸血療法を提供するためには輸血過誤の防止と輸血副反応予防が欠かせないと言われています。今回当院における安全な輸血のための取り組みについて製剤・患者照合の観点から報告します。

当院は特定機能病院で病床数は 915 床あり看護師は 957 名が勤務し、福岡県西部地区の中核・拠点病院として地域の医療を担っています。またＩ＆Ａ認定施設でもあり、令和４年度の年間輸血使用量は RBC9091 単位、FFP6039 単位、PC8440 単位と頻繁に輸血を行なっています。当院では厚生労働省の「輸血療法の実施に関する指針」をもとに輸血実施手順書を作成し運用しており、スタッフは医療安全管理ポケットマニュアルを携帯することで輸血実施手順書と副反応発生時の対応がいつでも閲覧可能な状態となっています。

↑医療安全ポケットマニュアル

輸血を行う場合、多くの病院と同様に医師が電子カルテオーダリングシステムにて輸血検査、血液製剤オーダーを行います。オーダリングシステムでは血液型と交差適合試験の同時採血を予防するために、検体は同時オーダーできないようシステム制限されています。検体は血液型と交差適合試験用を別々のタイミングでそれぞれ携帯情報端末（以下 PDA）認証により患者確認を行い採取しています。また当院では急性重篤副反応発生時に直ちに対応できるよう、輸血投与は医師立ち合いのもと開始すると定めており、血液製剤受領前に必ず医師と看護師で時間調整を行います。


↑医師と看護師で
指差し声出し確認

輸血投与の際、看護師は患者間違いによる異型不適合輸血

防止のため「受領」「準備」「実施」の３場面で特に厳重な安全確認行為を実施しています。血液製剤受領時は医師の発行した輸血依頼書控を持参し、看護師と検査技師が輸血依頼書控、血液製剤払出伝票、血液製剤にて「患者名」「患者 ID」「血液型」「輸血日」「製剤種類」「単位数」「LOT 番号」「有効期限」を指差し呼称しながら確認し外観確認後、血液製剤払出伝票にサインをします。

↑ PDA 認証システムを用いた確認

準備時は病棟で医師・看護師または看護師同士で再度同様に輸血依頼書控、血液製剤払出伝票、血液製剤を用いて指差し呼称にて確認を行います。実施時は医療者同士の確認に加えて、患者参画による確認と PDA 認証システムを用いた確認を行います。患者が医師から輸血の説明を受け必要性を理解できているか疑問点はないか確認し、フルネームと自身の血液型を述べてもらいます。その上で PDA 認証システムを用いて患者のリストバンドと血液製剤の照合確認を行います。また医師は輸血開始後５分間必ず観察を行い、問題ないことを確認した上で血液製剤払出伝票にサインを行なっています。その後 15 分後、それ以降の観察は看護師が行い急性及び遅発性副反応の有無を観察しています。このように輸血過誤防止のため医師・看護師・検査技師が連携し厳重な基本的確認行為を実施すること、副反応発生時に備えた輸血実施体制を構築することで安全な輸血療法の提供に努めています。今後も学会認定臨床輸血看護師として院内輸血教育などの活動を通して輸血療法における医療安全文化醸成のため取り組んでいきたいと考えます。

「パネルディスカッション２　輸血の実施手順」のご案内

5 月 30 日（木）13：10 ～ 14：40
第６会場（京王プラザホテル新宿４F 扇）（敬称略）

座長：奈良総合医療センター　東山　しのぶ
東海大学医学部附属病院　橋本　千佳

演者：福岡大学病院　辻 雄大
「製剤・患者照合における安全のための取り組み」

演者：済生会滋賀県病院　松本 牧子
「輸血副反応の観察とアセスメント向上に向けた取り組み」

演者：JA 愛知厚生連豊田厚生病院　小見山 貴代美
「看護師の外観確認の現状～アンケート結果から明らかになったこと～」

演者：神奈川県立こども医療センター　安藤 和美
「小児特有の製剤管理と認証」

皆様のご来場を心よりお待ちしています。

～血液センターよもやま話～

北海道における血液センター広域事業運営体制

日本赤十字社　北海道ブロック血液センター
阿部　康一

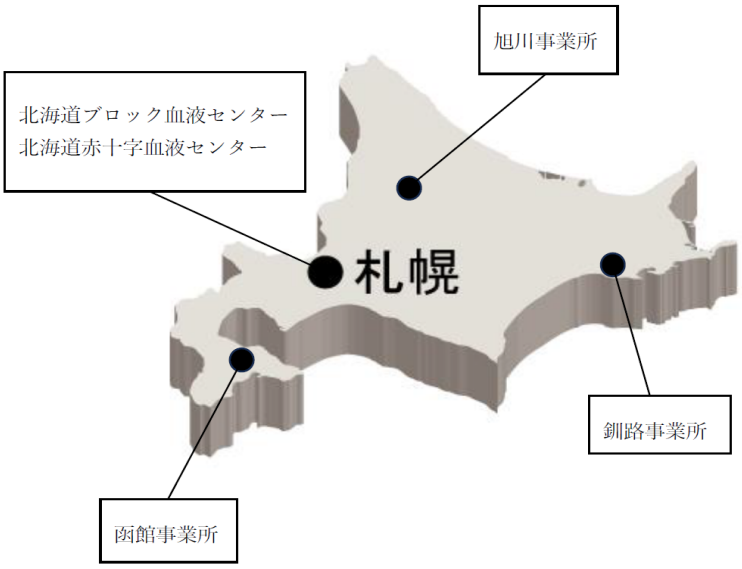
過去の血液事業は、全国 77 の各血液センターで、事業・財政・人事等において独立的に運営しておりましたが、1990（平成 2 年）「血液センター単位に分散化されている状況では、効率的、合理的な事業が困難である」と厚生省（厚労省）より通知があり、採血・製造・供給の各機能に即した効率的、合理的な組織形態の構築が望まれました。

北海道では、札幌、旭川、釧路、室蘭、函館に血液センターが設置されており、独自に運営していましたが、事業の効率化を図るため、1999 年（平成 11 年）始めに、血液製剤の安全性と品質向上を目指し、道内血液センターにおける検査・製剤部門の集約に着手しました。この年の 9 月室蘭赤十字血液センター（当時）の検査部門を北海道赤十字血液センター（当時）へ集約を機に、2002 年（平成 14 年）4 月、札幌市の北海道赤十字血液センターを本センターとして、旭川、釧路、室蘭、函館を付属センターとして位置づける北海道ブロック一体化運営を開始しました。

2003 年（平成 15 年）7 月には、国の血液事業の理念を定めた法律「安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律」（血液新法）が施行され、国、地方公共団体、採血事業者、血液製剤の製造販売業者等、医療関係者の責務が明確に定義され、現在に続く血液事業が始まりました。また、以下の点を更に充実させることが、広域事業運営体制構築の目的でありました。

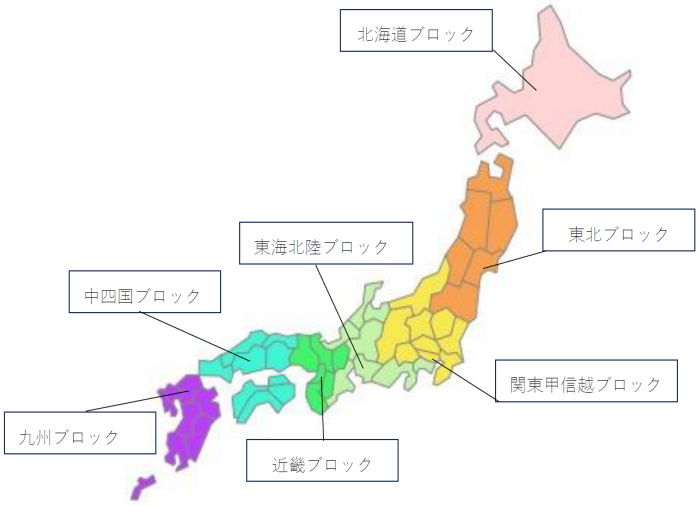
（1）安全対策の充実
（2）血液製剤の安定供給
（3）事業の効率化
（4）健全な経営基盤の確立

日本赤十字社は、この法整備を踏まえて、血液事業に関する権限と責任を明確にした組織体制の構築と血液製剤の安全性をより向上させるため、日本赤十字社の関係規則を一部改正して、2004 年（平成 16 年）10 月に「血液事業本部」を設置しました。



↑図 1

北海道では 2013 年（平成 25 年）北海道赤十字血液センター旭川事業所製造部門の集約をもって、道内献血血液の検査・製造は全て札幌で行う体制が確立し、札幌市に日本赤十字社北海道ブロック血液センターと、地域センターとして北海道赤十字血液センターが設置され、旭川・釧路・函館の付属センターは、それぞれ事業所（図 1）として改組されました。ブロックセンターでは、血液の需給管理、検査及び製造管理を主たる業務とし、これまでの各都道府県単位での血液センター運営から、全国 7 ブロック（図 2）を単位とする運営体制に変更となり、更なる事業の効率的な運営を進めていくことが可能になりました。



↑図 2

この体制が始まり振り返ってみると、広域的な需給管理により輸血用血液製剤の血液型別、種類別の在庫をブロック単位で管理するため、各都道府県単位での在庫不均衡が是正され、患者さんが必要とする輸血用血液製剤の安定的な供給が促進され、血液製剤の期限切れの減少など献血者の善意に一層お応えできる体制となりました。

また、資金の一元管理により、安全性の向上や安定供給の確保など必要な事業への効果的な投資が可能となり、スケールメリットを活かした経営の効率化が促進され、健全な経営基盤の確立、さらに血液製剤の「安全性の向上」と「安定供給」が確保され一定の効果があったと評価できるのではないかと思われます。

編　集　後　記

2024 年は能登大地震から始まり、ウイズコロナそしてほとんどの方は現在ポストコロナの気持ちではないでしょうか？災害に遭われた方には一早い復興を、そして皆様方には 4 年間のコロナ呪縛からの復活を願いたいと思っています。

さて今年 5 月 30 日から 3 日間、日本輸血・細胞治療学会学術総会が京王プラザホテル新宿にて開催されますが、田中朝志総会長の思いがぎっしり詰まった内容になっています。特にコミュニケーションの本質を掘り下げる企画や、次期 ISBT 会長 Pierre Tiberghien 先生『Hemovigilance と PBM』の特別講演、台湾輸血学会や韓国輸血学会との交流セッションなどは興味があるところです。また臨床検査技師関連は、５つのシンポジウム、パネルディスカッション企画が予定され、看護師さん関係では、輸血実施手順のパネルディスカッションがあり、その講演される内容の紹介があります。また最後に、北海道ブロック血液センター広域事業運営体制の歴史の紹介がありますが、北海道は羨ましいことに近年ずっと献血率全国首位を継続されていますが、輸血用血液製剤を安定供給していくには、常にこのように改善していくことで成し遂げられていくのだろうと、大変参考になりました。

皆様とは 5 月 30 日に、京王プラザホテル会場でお会いできるのを楽しみにしています。

（米村雄士）

一般社団法人日本輸血・細胞治療学会　広報委員会

委員長

加藤 栄史　（医療法人福友会 福友病院介護医療院）

副委員長

松本 雅則　（奈良県立医科大学附属病院）

委員（50 音順）

生田 克哉　（北海道赤十字血液センター）
石井 洋子　（船橋市立医療センター）
岸野 光司　（自治医科大学附属病院）
小見山 貴代美（豊田厚生病院）
鳥海 綾子　（慶應義塾大学病院）
長村 登紀子　(東京大学医科学研究所附属病院）
野﨑 昭人　（横浜市立大学附属市民総合医療センター）
東山 しのぶ　（奈良県総合医療センター）
日髙 陽子　（東邦大学医療センター大森病院）
藤井 紀恵　（藤田医科大学）
藤田 浩　（東京都立墨東病院）
松本 真弓　（神鋼記念病院）
森山 昌彦　（東京都立墨東病院）
山崎 喜子　（青森県立中央病院）
山田 麻里江　（佐賀大学医学部附属病院）
吉田 雅弥　（熊本赤十字病院）
米村 雄士　（熊本県赤十字血液センター）

担当理事

羽藤 高明　（愛媛県赤十字血液センター）

編集協力

佐藤 裕基　(旭川医科大学　内科学講座　消化器内科学分野）